

カンボジア通信

カンボジア教育支援基金 (KEAF-Japan) 会報

2018年6月

87号



〒162-8433 東京都新宿区市谷本村町10-5
JICA地球ひろば気付

カンボジア教育支援基金事務局

info@keaf-japan.com
http://keaf-japan.com

後期分奨学金を届けました

教員養成所、新1年生6人と面接

2018年度奨学生の後期分奨学金を届けるのを主な目的として、3月12-17日の日程で現地の支援学校を訪問しました。今年度奨学生は高校生が147人、教員養成所（2年制）の学生が10人で、このうち2年生の4人には10月に支給済み。残りの6人は合格が決まったのが10月だったので、今回訪問で面接して奨学生と決め、1年分を支給しました。

教員養成所奨学生は前年度まではタッコー、コンポントゥラバイ両校卒業生それぞれ2人の計8人でしたが、今年度からプロモルプロム高校卒の1年生2人が加わり、1年生が6人、2年生が4人です。来年度は枠一杯の12人になります。

各学校の校長先生あるいは副校長先生には、来年度（2018.11-2019.10）の奨学生枠は現年度数を維持できるだろうと伝えました。

大学奨学生は2017年度から新規募集を止めたので、現役の3年生と4年生の2人だけが残っています。大学奨学金制度は2008年度、試験的にプロモルプロム高校卒業生1人に支給したのが始まりでした。2011年には支援者から大学生奨学金基金の提供を受け（楓基金）、これまでに11人に支給、9人はすでに卒業しています。楓基金はほぼ全額を使い切ったので、プロモルプロム高校には教員養成所奨学生2人に切り替えることで理解してもらいました。

4階建て新校舎が登場

プレイヴェン州の州都プレイヴェン市にあるプレアンドゥン高校は州のモデル校です。州内の高校では初めてという4階建て新校舎がその外観を現わしていました（左の写真）。同校の校舎はこ



れまでは2階建てまででした。

プレイヴェン州には州都に続いて12の郡都が置かれています。KEAFが支援活動をしているのはそのうちの2つ、プレアスダイ

とコンポントゥラバイ両郡だけです。

プレアスダイ郡都にあるプロモルプロム高校

では2014年に2階建て校舎ができて、びっくりしました。その後、プロモルプロムに近いタッコー高校でも2階建て校舎が新設されました。コンポントゥラバイ郡都にある同名の高校では、3階



建て新校舎の完成が近づいていました（上の写真）。

最も貧しい州のひとつとされるプレイヴェン州の田舎にも、首都プノンペンの高層ビル建築ブームの風がやっと届いてきたようです。（金子記）

地域保健センターを訪問

コンミュンごとに設置始まる

3月訪問では支援学校の近くにある地域保健センターを初めて訪ねてみました。ひとつはKEAFが支援する学校の大半があるプレアスダイ郡の一番南、ベトナム国境に近いプレイトープ小・中学校のすぐそばにあるプレアスダイ医療センター(右上の写真)。

もうひとつは同郡の東側に接するコンボントゥラバイ郡のプラテアート中・高校の隣のプラテアート医療センター(下の写真)。ちょうど若い夫婦が生まれたばかりの赤ちゃんの診察にきていました(お母さんは診察中)。

どちらもこの2年ほどの間に相次いで2階建てコ



ンクリート造りの立派な庁舎ができて、私たちの目を引くようになったのです。

センターのお医者さんの話を聞くと、政府が2003年ごろから各州の郡都に地域の中心になる病院を建て、次に郡の下で統治機関でシステム、5~10の村から構成されるコンミュンに順次、診療所を開く計画を進めているのだそうです。

医師はまだ定員満たせず

プラテアート保健センターの場合、医師(準医師も含めて)の定員は11人だがセンター長のナット・スノウトさん以下、まだ5人しか揃っていません。これに地元民2人をスタッフとして雇っています。プレアスダイ・センターでは医師はターク・フィークデイさんと準医師の2人に地元スタッフ4人。

センターでは日常的な病気の治療や保健相談を受け持ち、それを超える難しい病気やけが(中級以上と表現)などの患者は郡都の病院へ送ります。プレアスダイ郡の場合は、プロモルプロム高校のある郡都に2000年代の中ごろ産婦人科とHIV治療のための病院ができ、その後順次拡張して一応は総合病院が出来上がっています。

センターでの風邪や腹痛、けがなどの診察、処置の

料金は2,000リエル(約60円)。結核やHIVなどの感染症は無料。治療代が払えない貧困家庭も少なくありません。コンミュンから証明書をもらえば医療費は免除されるとのことでした。

両センターが担当する地域(コンミュン)の人



口や郡都の病院へのアクセスなどの条件が違っているとは思いますが、1カ月平均の患者数はプラテアート・センターが300人、プレアスダイが1,000人と大きな違いがありました。

さっそく「要望書」

KEAFは「草の根」支援しかできないが、何かできることがありますかと聞きました。プラテアートでは「考えておきましょう」ということでしたが、プレアスダイではすぐに欲しいもの「メモ」をまとめてくれました。

帰国後に助手を務めてくれたナット君から届いた翻訳を見て「ウーン」でした。血圧計、体温計、包帯、ケガの洗浄剤にA4用紙、ファイル、ホチキス、ペンなどは支援可能な範囲です。テーブル、ベッドといった大物、手術用具、出産用具など専門の医学機器類となると、KEAFの手には負えそうもありません。でも、可能なものには何とか応える努力をしたいと考えています。



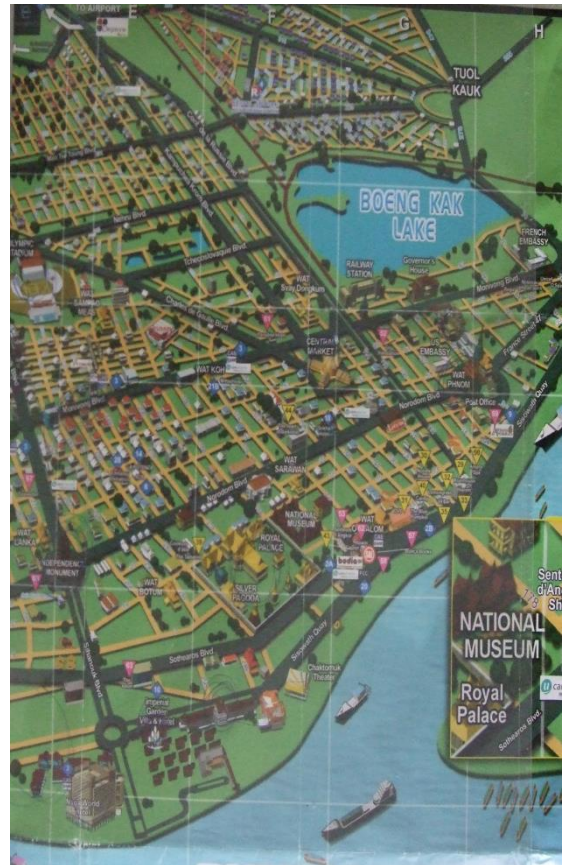
上の写真：中央の白い帽子の2人がお医者さん。左の2人はプレイトープ中学教頭と同小学校校長先生。右が筆者。(金子記)

リトル・パリが変貌

沼沢湖埋立て、商業団地開発 縦・横に“膨張”する首都プノンペン

首都プノンペンは宗主国フランスが粋をこめてつくった瀟洒な街で、戦争前はアジアの「リトル・パリ」と呼ばれました。ベトナム戦争に引きずり込まれ、さらに長い内戦がやっと終わってから四半世紀、フン・セン政権の「開発独裁」による高度成長が続いて、高層ビルが立ち並ぶ喧噪の大都市に変貌しました。今や爆発寸前となって、首都の北東部にあった大きな沼沢湖の埋め立てによる大拡張工事が進んでいます。

右上の写真はプノンペンの中心部（観光案内地図から）。右側の上（北）部にあったのがボウエンカック湖。これが全て埋め立てられました。右側下（南）はトンレサプ川。ボウエンカック湖から南へ鉄道の中央駅、米国大使館、中央市場、プノムの丘、カンボジア仏教の総本山・ウナローム寺、国立博物館、金箔の王宮などがある。川沿いの緑地帯にはレストランやホテルが並び、市民や観光客の散策の広場になっています。



住民を強制退去

ボウエンカック湖の周辺には長い戦争の間に多数の難民が住みつき、スラム状態になっていました。ポル・ポト政権の恐怖政治のもとで土地は全て国有化され、土地台帳などはほとんど失われました。現政権は土地の国有制度をそのまま引き継ぎました。プノンペンの土地が手狭になって価格は暴騰、政府はこの沼沢地に目をつけたのです。



住民に強制退去を求め、これを拒否する住民との間で紛争が起きました。カンボジアでは戦後復興にあたって国連の支援で法体系の整備が進められ、民法造りの支援は日本が担当しました。新民法では所有権は無くても居住権があるとされています。住民支援に加わった若い弁護士がこの居住権を盾に取り、住民が満足できる金額ではなかったけど、政府に補償金を払わせることができました。

流れ込む中国マネーと人

左の写真の左半分は埋め立て地。奥の方には新しいビルが出現しています。副都心開発ともいえるこの首都拡張工事には巨額の中国マネーが流れ込んでいるそうです。

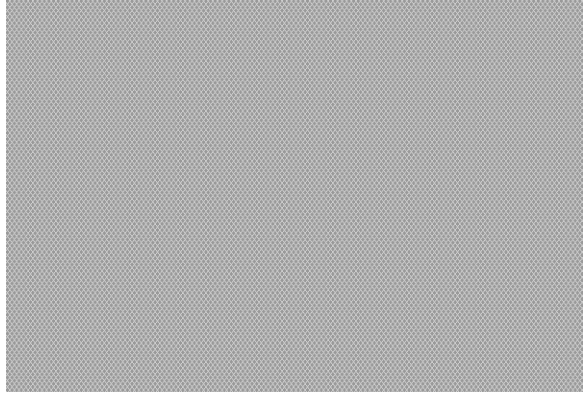
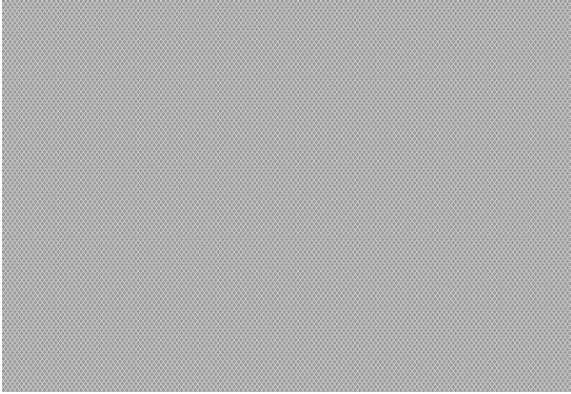
アジアだけでなくアフリカや中南米でも同じようですが、中国マネーは多数の中国人労働者とパッケージになっています。下の写真では、コンクリート塀がめぐらされた中に1数棟もの集合集宅が建設中。中国人労働者のための宿舎だそうです。



国道1号線からメコン川に沿ってプレイヴェン州都に向かう州道で大がかりな土木工事が行われていました。

1号線と同市を直結し、さらに同市から国道6-7号線へとつなげて、ベトナムとアンコールワットを結ぶ観光ハイウエーを開くというのが目的とのこと。この工事を請け負っているのも中国です。

◇大学奨学生（2人）



メディアの弾圧続く

親政権投資家が英字紙買収

強権姿勢を強めているフン・セン政権によって日刊英字紙『カンボジア・デーリー』が昨年9月廃刊に追い込まれた後、唯一残った英字紙『プノンペン・ポスト』が5月にフン・セン首相とつながりのあるマレーシアの投資家に買収され、報道の自由を掲げる独立系紙としての存在を終えました。

この投資家が経営するPR会社はフン・セン政権のPRに関わってきたとされています。新オーナーはジャーナリストから投資家に転じたマレーシア人で、これまでの同紙の報道を破壊活動すれすれの非道徳的、不用意で悪意に満ちたものと激しく非難しています。経営、編集の幹部はそろって解雇されるか辞任しました。彼らのほとんどは欧米人で、残ったカンボジア人によって薄っぺらな「新プノンペン・ポスト紙」の発行が続けられています。

同紙は1992年欧米人が創刊、隔週刊、週刊から2008年には日刊紙となり、週刊カンボジア語版も発行していました。発行部数は2万部ですが、カンボジア情勢を知る手がかかりとして周辺諸国にも広く読者を持っていました。



廃刊のCD紙はFBで配信継続

昨年廃刊になった『カンボジア・デーリー』も終戦直後に米誌『ニューズ・ウィーク』東京支局長だったB.クリチャーさんが1993年の制憲議会選挙を経てカンボジアの国家再建が始まった時、「報道の自由」に立つ新

聞が必要だと米国人の若い記者を呼び集めて創刊しました。

筆者（金子）には務めていた共同通信の英文ニュースを提供し、クリチャーさんと一緒に若い政府職員や大学生に自由な社会における報道の役割について講演をして歩いた思い出があります。

同紙の廃刊をめぐって、発行人は長女デボラ・クリチャー・スティーラーさんが引き継いでいたことを知りました。母親は日本人で日本育ち。廃刊後もフェイスブックで毎日、カンボジアに関するニュースを送り続けているそうです。

下の写真は独立記念塔のサークルに面したフン・セン首相の官邸兼邸宅。



ありがとうございました (2018年3月1日～2018年5月31日)

年会費、寄付金、奨学金をお振り込みくださった方々に心からお礼申し上げます（敬称略させていただきます）

(神奈川) (東京) (東京) (東京) (東京)
 (東京) (神奈川) (茨城) (東京) (東京) (東京)
 (東京) (東京) (東京) (東京) (神奈川) (静岡)
 (東京) (大阪) (東京) (東京) (東京) (大阪) (群馬)
 (秋田) (東京) (神奈川) (神奈川)
 (神奈川) (兵庫) (神奈川) (東京) (埼玉) (東京)
 (東京) (神奈川) (千葉) (東京) (東京)
 (東京) (埼玉) (ドイツ) (東京)
 (大阪) (東京) (熊本) (神奈川) (京都)
 (神奈川) (千葉) (埼玉) (埼玉) (埼玉)

※お名前は個人情報なので伏せて掲載しています。 ※写真つき奨学生紹介の4頁は個人情報保護のため省略

物品支援ありがとうございました

▽サッカーユニフォーム 25 着分 () ・東京) ▽トートバッグ 10 個・東京)
 ▽ケン玉、縄飛びわなど遊具 () ・東京) ▽ノート、鉛筆、絵具、メモ用紙、ファイルなど学用品 () ・埼玉) ▽ノート、鉛筆など学用品いろいろ () ・茨城)



に北朝鮮の核開発問題で、今は大忙しの時間を割いてくれることになりました。左の写真は 2017 年に完成した平壤の高層住宅街。最高のビルは 70 階建て。夜景がニューヨークのマンハッタンに似ていると平壤（ピョンヤン）をもじって「ピョンハッタン」と呼ばれています。2017 年 9 月 15 日、安尾さん撮影。

安尾芳典さんが事務局メンバーに 朝鮮問題の現役記者です

事務局に安尾芳典さんが加わりました。安尾さんは池内さんや小生と同じ共同通信出身。社会部、外信部をへて今も客員論説委員をしている現役記者です。社会部時代は司法担当でロッキード事件の取材にあたり、外信部に移ってからはバンコク支局長、ソウル支局長を務めました。バンコク時代はポル・ポト派勢力がようやく衰退、国連監視下の制憲議会選挙が行われた時期でした。

韓国留学経験があり、北朝鮮訪問も 10 回という朝鮮問題の専門家です。ご存知のよう

校長先生の娘さんが日本留学

プレアンドゥン高校の校長先生の娘さんが（写真）国際交流基金の留学生の選考をパス

して、4 月から日本にきています。1 年間日本語を勉強した後、進学先の大学が決まるとのこと。



バカレロアで数学が全国一だったとそうです。前途洋々、楽しみです。